

B-56

がん性胸膜炎に関する研究

—とくに胸膜生検組織像を中心として—

日大第1内科

○勝呂 長, 中村敏雄, 安藤 修, 萩原忠文

I. 目的

近年, 肺結核症の発症年令が次第に老年層へ移行し日常の臨床, 高年者の結核性胸膜炎に遭遇する機会は必ずしもまれではなく, 一方肺腫瘍の著増とあいまって, がん性胸膜炎の併発例が多い。したがって早期診断および治療の立場からも, これら2疾患の確実な鑑別診断を必要とすることが少なくない。これらの点について従来より種々検討して報告してきたが, 今回は, そのごの成績を加えて報告する。

II. 方法

被検例は, 最近の7年間に当科に入院した胸水貯留患者中, 手術あるいは剖検で確認しえたがん性胸膜炎41例(男25例, 女16例)で, のべ64回の体壁胸膜の経皮的針生検を実施した。年令分布は20~78才(平均56.8才)で, 胸水の貯留度は高度例が25例, 中等例が15例で, 胸水の色調は血性が23例, 非血性が18例で, 罹患部位は右側31例, 左側10例であった。また生検までの時期は推定胸水貯留時より9~60病日までで, うち大多数は20日前後の症例であった。生検はDe Francisの方法に準じてCope型生検針で行ない, 1回に1~2個ずつ採取し, 10%中性ホルマリンで固定後型のごとく光顕標本を作成して観察した。

III. 結果

1. 41例について, のべ64回の生検を実施したが, うち組織学的にがん性胸膜炎と診断しえた症例は29例(70.7%)で, がん性胸膜炎と診断しえなかった症例は12例で, その大部分は非特異的慢性炎症像を示した。生検の回数は1~5回(平均1.6回)で, 生検回数別でみると, 64回中42回(65.6%)であった。2. がん性胸膜炎の組織像は扁平上皮がんおよび類表皮がん5例, 未分化がん6例, 腺がん10例, 分類不能がん8例, 陰性12例であった。3. 胸水の色調別で陽性率をみると, 血性例23例中19例(82.6%), 非血性例18例中10例(55.5%)で, 血性例で高率で, のべ回数別でも血性例39回中28回(71.8%), 非血性例25回中14回(56.0%)であった。4. 原発巣は肺がん由来が高頻度で, 乳がん, 直腸がん, 胸膜中皮腫などがみられた。

IV. 結論

胸膜炎の病期, 組織型の差異, 生検前の治療などで診断率は必ずしもなお十分ではないが, 生検回数の増加および部位の選定などを考慮すれば, さらに診断率を向上しうる。本法は本症の診断, 治療およびその効果判定上からも価値あるもので, 日常の臨床のルチンの検索に加えたい。

B-57

教室における最近17年間の肺癌剖検例

—肺癌383例の臨床病理学的解析—

東京大学医学部病理 浜松医科大学病理 森田豊彦

目的: 肺癌の発生, 経過, 推移を総合的に考察し現状を把握するため前記教室の剖検例を用いて検討した。

方法: 東大医学部病理学教室の1958年(昭和33年)から74年迄の17年間の7686剖検例を使用した。剖検輯報より肺癌例を選び, 解剖台帳, 剖検記録, 保存臓器, 組織標本及び臨床病歴を調べ, 年令, 性, 臨床経過, 治療, 喫煙歴, 肺疾患, 肺癌の発生肺葉, 区域, 転移臓器及び病理組織型を検索した。胃癌, 肝癌例等を参考にした。教室の肺癌例は1889年以来鈴木(1933), 北川(1965)により整理されておりその結果を参照した。結果: 1. 全体の傾向 最近17年間の肺癌は383例, 胃癌580例, 肝癌213例である。5年区分すると全解剖例中悪性腫瘍は(I)1959-63年40, (II)64-68年44, (III)69-73年54%, 全解剖例中の肺癌は(I)4.5 (II)4.7, (III)5.9%, 悪性腫瘍中の肺癌は各11.3, 10.7, 10.9%で1889年以来漸増し, 1959年から10%を越す。

2. 性差 男290, 女93例で性比は3.2:1。5年期中(I)3.2:1, (II)2.6:1, (III)3.5:1である。

3. 年令 20才未満, 90才以上に肺癌例なく, 20代6, 30代14, 40代44, 50代89, 60代144, 70代78, 80代8例で男女共60代が最多で男40, 女29%, 広くは40-70代に多く全体の93, 男94, 女89%の症例が含まれた。

4. 組織型 扁平上皮癌(以下: 扁)96, 未分化癌(未)83, 腺癌(腺)194, 他10例である。扁: 未: 腺は1.2: 1.0: 2.3, 男性ではその比は約1: 1: 2, 女性でその比は約1: 1: 4であった。

5. 臨床経過 全例の平均臨床経過は9.8月, 男9.7, 女10.0月。3年期中では58-60年男女合わせて8.0, 65-67年8.2, 72-74年10.1月であった。対症療法のみ112例の臨床経過は7.0月, 手術を受けた11例の経過は14.4月, 手術後平均9.5ヶ月で死亡している。

6. 喫煙 非喫煙者75, 量不明喫煙者5で喫煙率は78.9%, 20本未満32, 20-40本38%, 40本以上8.8%で約半数が20本以上喫煙者だった。非喫煙75名中女性が45名で, 男19, 女37例が腺癌である。40本以上の31名では男性30名で男15, 女1例が扁平上皮癌であった。

7. 肺癌の左右 右側198例, 左側184例であった。

8. 肺葉別 右上葉88, 右中葉16, 右下葉87, 左上葉97, 左下葉87例であった。

9. 区域別 S₁, S₂, S₃などに多く, 肺区域の判明した277例の約半数がこれらの3区域に含まれた。

10. 転移臓器 転移の多い臓器とその転移率は順に, リンパ節92, 肺55, 胸膜49, 肝44, 骨42, 副腎36, 腎29, 脳29, 心嚢22, 骨髄16, 縦隔14, 脾11, 心10%等。

11. 肺結核他肺病変 肺癌の他葉の結核61, 同一葉の結核23, いわゆる癆痕癌14, 他肺病変15例等であった。